

ことば，エスノグラフィー，そして教育 —ニュー・リテラシー論とブルデューの橋渡しをする試み Language, Ethnography, and Education: Bridging New Literacy Studies and Bourdieu

M・グレンフェル，D・ブルーム，C・ハーディ，K・ポール，J・ローセル & B・ストリート／2012 ルートリッジ

Grenfell, M., Bloome, D., Hardy, C., Pahl, K., Rowsell, J. & Street, B. /2012 Routledge

藤田ラウンド 幸世 FUJITA-ROUND, Sachiyo

● 国際基督教大学教育研究所

Institute for Educational Research and Service, International Christian University

本書は，教室のエスノグラフィー，ニュー・リテラシー論，ブルデューの理論，それぞれの変遷を辿る「旅」をしながら，今後の方向を一緒に考えるといった趣の本である。

これまで，エスノグラフィー，‘New Literacy Studies (本稿では，以下，ニュー・リテラシー論と訳出)’，ブルデューの理論は，個別に研究されることがほとんどであった。本書は，それぞれの先行研究が熟してきた21世紀の現在において，三つの鍵概念を組み合わせ，新たなリテラシーの研究の方向性を照らし出そうというものである。章の順序通りに読み進めると，本書は，まさに「リテラシーに関わる新たな地平を切り拓く」ための作業を「実践」していることに気づくだろう。

全体は3部からなる。第一部は，「ニュー・リテラシー論とブルデューの橋渡しをする試み」として，第一章に全体の概説と各章の紹介，第二章から第四章にかけては本書の鍵概念となる「教室のエスノグラフィー」，「ニュー・リテラシー論」，

「ブルデュー，ことば，そして教育」を概説している。第二部では，「ことば，エスノグラフィー，そして教育」として“case samples”である研究が4本提示される。第三部は，第一部と第二部の展開部分として，「交差する概念の展開を求めて—理論と実践の往復」と題し，ブルデュー理論との接合を意識した2本の論文を収めている。以下，各章を概観したい。

第二章のBloomeは，初めに教室のエスノグラフィーとはギアーツ (1972) のいう「厚い記述 (thick description)」をもって教室の中で何が起きているのか，社会的，文化的な視点を生成する研究実践であると位置づける。教室のエスノグラフィーの核となる部分はエスノグラフィーの定義そのものであり，「文化人類学」のギアーツから始まり，「ことばと教育」に関わるエスノグラフィーを「文化」，「社会」，「心理」人類学に依拠をしながら，‘the multiple dimensions, aspects, domains, institutions, activities, practices, and settings

of social group'を丸ごと、文化的に記述することであると位置づけた。

本章は、1960年代以降の数々の教室のエスノグラフィー研究を駆使しながら、「教室とは何か」、「教室の中には誰が、何が存在するのか」、「教室の中では何が起きているのか」、「教室の中の言語と文化」、「よくできる生徒」、「教室のエスノグラフィーと文化間の（ミス）コミュニケーション」を節ごとに問い、分析している。帰結として、教室のエスノグラフィーは、教室で起きているすべての事情を研究するのではなく、その点では本質的に不完全であると述べ、しかし、それゆえにミクロに完結された文化である「教室」だけに閉じられてしまう可能性があり、教室を取り巻く広範な文化や社会の関係をどう追及できるか、ここに他章との接近により補完ができないかと問題提起をする。

第三章のStreetは、1980年代以降、新たにリテラシーを問い直した「ニュー・リテラシー論」を主導してきた一人であるが、「大概、教育の中のリテラシー¹は読み書きのための技術のセットとして、また、認知的な学習論、活動論の理論と通して学ぶと考えられがちである。しかし、ニュー・リテラシー論は、教育システムの中だけではなくそれ以外の幅広い社会的な文脈の中での、読むということ、書くということの研究でもあり、そこではエスノグラフィー的アプローチを採用する(p.28)」と、初めに改めてニュー・リテラシー論とエスノグラフィーの関係性に光を当てる。「社会的実践としてのリテラシー (Street, 1984)」を理解するためには、日々の社会的実践に関わる、多面的な、時間や場面、またパワー（力関係）により異なる、複数のリテラシー (multiple literacies) を認識しなければならず、そのためにもエスノグラフィーが有効であることを示唆する。新たなリテラシーの意義に関して、1970年代のリテラシーに関わる認知理論から現在までの先行研究の変遷をコンパクトに解題することにより、本質主義から構築主義の流れ、また、文字に関わる「技術」を持たない「子ども」が読み書きのための文字を「学校教育」の中で「自然に」「習得」するものだ

という言説がいかに限定的である、ということに気付かせてくれる。

Streetは、エスノグラフィーからリテラシーを研究することにおいては、Street (1988) の 'multiple literacies (複数のリテラシー)' に関わる 'literacy event' と 'literacy practices' の概念が、A. B. Anderson (1980), Heath (1982b), Street (2000), Barton and Ivanic (1991), Baynham (1995), Barton and Hamilton (1998) らの研究により、洗練されてきたという。加えて、本章では「ニュー・リテラシー論」の研究に対する批判となる Brandt and Clinton (2002) の 'the limits of the local' も丁寧に読み解く。さらにこの批判を超えるためにも、新たな教育への応用に発展させる必要があることを促し、その可能性の実現として第五章の自らのエスノグラフィーと、ブルデューの「ハビタス」や「フィールド」、社会的な文脈の中にリテラシーを位置づけることで、新たな 'practice (実践)' のニュアンスを持つアプローチを考えることができるのではないかと言及する。

第4章は、「ブルデューのことばと教育へのアプローチ」についての解説である。Grenfellはブルデューの背景を、ことばと言語の問題を提起したソシユールから、ブルームフィールド、レヴィ＝ストロース、アルチュセール、フーコーまでの流れを辿り、「人間に関わる哲学」はある意味、20世紀には「ことば」が哲学の中心と捉えられるようになった変遷を描き出す。もともと哲学者であったブルデューであるが、ソシユールの論考にも造詣が深く、また専門領域の知の形成においては实在主義と共にレヴィ＝ストロースと構造主義的文化人類学に影響を受け、さらにヴィトゲンシュタインに代表される20世紀の哲学での 'Linguistic turn (言語論的転回)' 以降、ことばは「生活の形 (form of life)」つまり、その言語使用によりことばが理解されるという考え方がブルデュー哲学の基盤をなしたという。学問上の影響以外にも、ブルデューへの決定的な影響として、出身地の Béarn 村とアルジェリアでの個人的な直接の経験があると Grenfell は指摘する。ここには、主体・主観として、人間としてのブルデューの姿

が浮かび上がる。

最後に、Grenfellは、ことばにおけるブルデューの論考として、1) ことばそのものの概念化、2) 異なる「フィールド」における言語使用、3) 言語学といったことばの科学の既成のアプローチへの批判、4) 日々のことば、他の学問領域のことばなどと区別するために、彼自身が概念化した語彙の4項目を挙げた。

第2部は実際のケースに基づいた研究を集めた「実践」部分である。第五章は、「エスノグラフィー的スタイルをとった研究の中で、訓練を通じたエンパワーメントのための学習」という題が示す通り、LETTERと略された、2001年にインドのデリーにある女性の組織のために、教育を通して行われた農村のDalitの女性たちへのエンパワーメントのプロジェクトの研究である。大人のための教育(adult education)を、ニュー・リテラシー論とエスノグラフィー的研究のアプローチで行っている。2007-8年にはエチオピアでも同様のプロジェクトが行われた。帰結の中で、エスノグラフィーの解釈にブルデューのハビトゥスとフィールド、パワーとイデオロギーなどの概念が役立つと言及する。第六章は、2005-7年に行われたイギリスの北イングランドにある6-7歳クラスの教室内の子どもたちのグループについての研究である。インタビュー・データ、フィールドノート、写真、言語のエスノグラフィーのデータがある。この研究はGrenfell(1996)がブルデューのから援用した「教える現場のハビトゥス」概念を検証している。言語のエスノグラフィーを方法論として据え、教室でのことばの相互行為に焦点を当てながら、教室内の写真と子どもたちの言語分析が行われている。この研究の帰結には、ブルデューの「実践の論理(logic of practice)」と関連性が言及されている。第七章は、2006-10年にアメリカのプリンストンにあるハイスクールの9年生を対象とした研究で、「自分のオデュッセイア」をデジタル・ストーリーとして作る教育プロジェクトである。そのうち、5人の子どもの作品をケーススタディとして分析している。動画のイメージは撮られる人の生活のスライスのようになっている

ので、これをfractal habitusと名付け、ブルデューのハビトゥス概念とマルチモダリティについて考察する。第八章の研究対象は、アメリカの6年生から12年生までのマグネットスクールと呼ばれるタイプの学校でのことばとアートの授業研究である。女性のウィルソン先生の7年生の30人のクラスでの授業から2つの会話のやり取りのデータ、つまり、教室のディスコースを分析した。文字の認識だけではなく、Freire(2000)らがいった「ことばとその世界、誰が主体で誰が客体なのか」を同時に読み解くことを目指して、教室のリテラシーのカリキュラムや教授法が学生の学びをどのように奨励するかを問いつつ、ブルデューの概念である生産や文化的生産を援用し、分析をした。

第三部は第一部と第二部との接合部分となる。第九章は、ここまでに至るエスノグラフィーと教室研究について、ことばのエスノグラフィーなのか、ことばの心理なのか。また、「教育的」スタンス、もしくは、「科学的」スタンスをとるのか、教育理論につなげる前の段階として、論点の整理から始まる。その上で、理論と実践について、ハーバース(1978, 1989)らを引用しながら、実践から理論に向かうときには「正当な理由づけの教育原理」と「基盤となる教育理論」の二つの異なる方向性があることを図示する。その後、第二部の実際の研究のそれぞれに対するコメントを行うという展開になっている。このコメントは、前節の「抽象化された理論」とは対照的である。抽象度のギャップが鮮明であるだけに、この順序においたのは恣意的なのかどうか、興味のあるところである。理論から実践はあっても、その逆はないのだろうか。読み手の柔軟性が試されるといってもいいだろう。結語の一つに、ブルデューがミクロというよりも、マクロの理論家であるので教室内で交わされる交流の詳細についてはほとんど述べることがないというHardy(2011)の引用は、次章への伏線となり、効いている。

第十章は、タイトルにある「ことば」「エスノグラフィー」「教育」が内包する文脈への問いから再び始まる。本書の研究の通奏低音ともなる共通した文脈は、ことばとリテラシーに焦点を絞り、

教室活動に「(人為的な実験でない) 自然のままの」「社会文化的」なアプローチであるものの、当然のことながら何を研究の主眼とするかは研究者が何を見たいかに依る。

ニュー・リテラシー論は、実際にリテラシーの文化的な構築に貢献し、新たなリテラシーの捉え方により、学びと教えの中には、ことば(文字)の技術のみならず、社会的、政治的、イデオロギー的な側面があることを照らし出すという貢献を果たした。しかし、Grenfellは、このヴィゴツキーの社会心理学的構築主義の立場においても、まだagencyとコンテクストの特異性と、学術に関わる知識を基盤とするアカデミック・ナラティブの必要性の間の緊張は残ると指摘する。だからこそ、agencyと文脈、研究者の関心に直結する「認識」を考えたときに、ブルデューの社会理論は重要で役に立つものとなると本書のゴールでもあるブルデュー理論との統合を示唆する。ブルデューのエスノグラフィーへのアプローチでは、全体への目配り、複雑さの受け入れ、その中での構造の組織化の探究をする。そして社会階級、言語資本、言語のハビトゥス、フィールド、社会空間といった、ブルデューの分析概念がある。帰結の中に挙げられた関係性は、今後の研究における研究者と研究のポジションを表すものだと考えることができる。特に、主観的経験と客観的理解間の関係を明瞭に見せるプロセスにおいては、今後の認識論へのまなざしとして重要であろうと評者は共感する。

本書に関する評を最後にまとめて書き留めたい。

本書が理論と実践とを往復、重複させながら、さまざまな材料を提供し、問題提起をしているところは「読む実践」、新しい試みとして読める。この「実践」は多くの示唆に富むものだが、ブルデュー理論との結合に関していえば、結合することでさらに複雑になるという煩雑さも生み出していることを指摘したい。例えば第二部の四つの独立したケースを取り上げる研究では、研究者それぞれの目的と学問領域によりブルデューを援用しているので、各研究者が想定しているブルデュー

の概念に温度差があり、読者としては十分読み込めたかどうか、不安が残る。

本書の第一部では、三つの領域について、それぞれの専門家が丁寧な先行研究の解題をしている。この領域に興味をもっている読み手にとっては、時間の流れにそって丹念に先行研究が編み込まれているので、最新の参考文献リストと共に、親切な内容となっている。

しかし、新たな「ニュー・リテラシー論」は、リテラシーの実践と理論をどのような形で統合できるのか。実践と理論、実践とエスノグラフィーをどのように区別するのか。また、実践から得た理論を教育理論や教育現場に戻すことが可能かどうか。読後、まだまだ疑問は沸き起こる。

Grenfellが最終章で言及するように、本書はまさに新たな視点を生み出すmeeting pointなのだろう。ここでは、リテラシーの研究者である著者たちは、三つの領域に関わる研究者たちが研究設問をさらに磨くような参考書として本書を読むことも意図しているのだろうか。

脚注

- 1 日本では、リテラシーは「識字」として訳出されることもあるが、「ニュー・リテラシー論」においては、この「識字」を新たに超えるための論とも捉えることができるので本書評では「識字」ではなく「リテラシー」とする。